

二〇一六年度 女子学院中学校入学試験問題 (国語)

一 次の文章を読んで下の問いに答えなさい。

(本文中の※は注として付記したものです。)

中央が少し膨らんだコンクリートの道。何かしらいつもとは違うものを感じて、近づいてそれが何なのかがあったところで、①私の目はそのままだ釘付けになってしまった。②あたかも画布でもあるかのように、愛らしい子どもたちと花や家などが③縦横に描かれてあった。あきらかに幼児のものとわかる描線は、イエロー、ピンク、ブルー、グリーン、ホワイトの五色のチョークで、道のなかほどまでも広がっている。子どもたちは実に楽しげに、またのびのびと、道の上で遊び戯れていたのだった。私は急いでカメラを取りに戻り、アングル(※角度)を変えては次々にシャッターを押した。

絵は、濃いグレーのコンクリートにしつくりと調和したパステルトーン(※淡い色づかい)で、四角い胴体、三角のスカートなど、幼児の絵の特徴を示しながらも、どこか心に沁み入るような哀感があつた。これが④遠くから消えてゆくもの、ほんの一雨であとかたもなくなくなるものだと直感したからかもしれない。幼児は誰かに見せるために描いたのでは⑤もとよりなく、ただこの戸外の道に無心のインスピレーション(※ひらめき)を得て、描きはじめたら、道は黒板よりもひろびろとして、さぞ楽しかったことだろう。深い山奥の湖のほとりに、咲いては花を散らす野草たちが、⑥誰かに見られるためではなく、まさしく自分自身のために咲いているように。

予感のとおり、その夜は雨になった。⑦路上の子どもたちは、のびやかな手足を流されはじめているだろう。何やら落ち着かぬ夜を過ごして、翌朝戸外に出てみると、あの生き生きとした絵は、もうこの世のどこにも存在してはいなかった。

それは遠い日の情景だったが、写真は今も私の手元に残っている。⑧仕事に使えないかと思ったりもしたが、装われるにふさわしい本には、いまだ巡り会えないままである。⑨著作権所有者も描いたことすら忘れ果てているはずだから、探す手立てはもはやない。

このうたかたの(※水にうかぶあわのような)人の世で、一生もまさに路上の絵のようなものではないだろうか。どれほど優れた仕事をしたとしても、不滅のいのちはついに宿らず、もともといなかった人のように消えてゆく。そのあとにまた絵が描かれ、ふたたび流されてゆく。しかし、いのちがはかないものだからこそ人は何かを残そうとし、はかなさの意味を思いめぐらすのだろう。その思いに「いのちの香り」があつたなら、⑩私は世間の評価や価値観を超えた共鳴を覚えてしまう。すでに定まった評価というものは、長いこと私自身には何の意味も持っていなかった。それは他者が与えた価値観だからである。自分の眼と手で見つけたものを、自分の流儀で愛してきた。それらがもう高い評価を受けている場合もあるし、まったく無名なときもある。そして、⑪後者のほうが、私には限りなくいい。

どこにでもあるのに、いつも新しい感動を呼ぶもの、それは一日の終りに⑫が焼けて、移ろってゆく朱の色、暮れてゆく董色、深い陰影に彩られた雲の流れや、微少な皺をつねらせている海のさざなみ、渚の風紋、燃え立つような紅葉、さまざまな六華のヴァリエーション(※種類)を見せてくれる⑬の結晶などである。自然や季節のゆるぎない彩りの前にあつては、無上の芸術もたちまち色を失ってゆく。自然の造形は、ただ美しく豊かであるばかりでなく、思い切りがよく、あらゆるものに対して平等だからである。

『本の夢 小さな夢の本』田中淑恵

受験番号

氏名

問一 ①とありますが、「目が釘付けになる」とはどうなることですか。解答欄にあわせて八字以内で答えなさい。

問二 ②の「画布」は、絵を描くための布のことですが、「画布」とは、ここでは何を表していますか。文中の語で答えなさい。

問三 ③「縦横」の読みを答えなさい。

問四 ④「遠くから消えてゆく」の意味を、次から選びなさい。

ア 遠くへ消えてゆく イ かならず消えてゆく
ウ いつか消えてゆく エ 間もなく消えてゆく

問五 ⑤「もとよりなく」の意味を、次から選びなさい。

ア けつてなく イ はじめからなく
ウ もちろんなく エ まよいなく

問六 ⑥は、どのようなことを表しているのか。次の中からふさわしいものを選びなさい。

ア 他の人に自分のしたことが見つからないように、自分の世界を大切にしたい。
イ 自分が誰かに気づいてもらえると信じて、今できることを熱心に行っている。

ウ 他の人にどう思われるかなど考えず、自分の気持ちのままに行動している。
エ 誰に何と言われようが、自分が満足することを優先して自由ふるまっている。

問七 ⑦とはどういうことですか。わかりやすく説明しなさい。

問八 ⑧「仕事」とありますが、作者はどのような仕事をしている人ですか。次から選びなさい。

ア 物語を考えて文章を書く人 イ 本の表紙などをデザインする人
ウ 子どもものの絵を撮影する人 エ 絵や写真を収集する人

問九 ⑨「著作権所有者」とは誰ですか。十二字以内で答えなさい。

問十 ⑩「世間の評価や価値観を超えた共鳴を覚えてしまう」とはどういうことですか。最も適切なものを次から選びなさい。

ア 一般的には理解されていないことに価値をおき、共感する。
イ 一般的には認められていない無名の場合にのみ、共感する。
ウ 一般的に想像を上回る自分なりの判断基準で、共感する。
エ 一般的に評価を得られているかには関わりなく、共感する。

問十一 ⑪「後者のほうが、私には限りなくいい」とはなぜですか。次から選びなさい。

ア 世間の評価がまだないものに自分が価値を見いだせたことで、喜びを感じるから。
イ 高い評価を受けているということは、自分の価値観が正しかったと安心できるから。
ウ はかなく消えてゆくものを愛することで、他者と異なる自分の個性に気づき満足するから。

エ それまで無名であつたということは、自分こそが発見者であると、ほこらしく思えるから。
オ 自然や季節のゆるぎない彩りは、新しい感動を呼び、自分の手で守りたくなるから。

問十二 ⑫・⑬にあてはまる言葉を漢字一字で答えなさい。

問十三 筆者の考えや感じ方に合っているものを、次から二つ選びなさい。
ア 街で出会ったものは、写真に収めておくといずれ役立つ。
イ いつかなくなってしまうものに意味を認めたい。

ウ 自分の感性で見つけたものをいつも人に評価されたい。
エ 人が生み出した芸術も自然も、平等の価値がある。

オ 自然には、その瞬間にしかない美しさがある。

(本文中の※は注として付記したものです。)

子どもの本の中では、老人と子どもが相性が良いものとして描かれることが多い。河合隼雄さん(※心理学者)は、それをいつかこんなふうに説明しておられました。「どちらもある世に近いからね」と。あの世からきて間もない人と、間もなくあの世に行く人と、という意味なんです。私はその時はなるほどと思い、①うまい言い方だと感心したんですが、やがてどうもあやしいと思うようになりました。

私はある頃から日常生活のちよつとした小さいことがすごく楽しくなってきた、その話がある方たちのグループでしましたら、そこにいらしたほとんど同年輩の方に、「それは歳をとったことでですよ」と言われたんです。日常の些細なことに喜びを感じるようになったら、それは歳をとったということだと。私は②そこなんじゃないかという気がします。幸福に驚く力は子どもにある。老人にもある。それでは壮年期の人はどうか。これはもう大変です。子どもと老人、両方の世代を支えるために現実のくらしの部分で③一手に引き受けなければなりませんから、そんなゆとりはないかもしれません。だいたい世界の外れにいるほうが、ものはよく見えるもので、④中心にいる人たちにはなかなかものは見えないわけです。壮年期の人たちは家族を食わせること、着せること、住まわせることを引き受けなくちゃならない。年齢がいつてやがて少し外れていけば、幸福に驚く時間もゆつたりとつことができてでしょうけれど、フィリパ・ピアス(※イギリスの児童文学者)は実はそういう壮年期の人々まで作品の中で見事に書き分けていますね。

私は若いころ、フィリパ・ピアスの作品を読んでいて、ピアスの作品に登場する子どもの親の世代、つまり壮年期の人たちはどうしてこんなに⑤ものわがりが悪いんだろうと思いました。子どもの問いにちゃんと答えていないし、どうして、もう少し子どもの方を向いて答えてくれないんだろうと思ったのです。なぜこんなにぶっきらぼうなのかと思ひ、なぜファンタスティックな(※空想的な)世界がこんなにわからないのかと思ひました。でも、このごろになって、そうだな、その世代が⑥しつかり支えているから、子どもは思存分、子どもとしていられるし、年寄りもまたそうしていられるのかもしれない。そう思うようになりました。そう思つて、あらためて読みなおしますと、ピアスの世代の書きわけ方は見事というほかない。

今や情報化社会はどんどん進展していつていますが、こういう時代だからこそ子どもの文学は力を持ち得るのではないかと、このころはますます⑦子どもの文学の力を考えるようになりました。(中略)

私は一昨年から、勤務先の短大の新入生に聞き始めました。「子ども時代の一番幸福な思い出は？」と。ところが最初の年に出てきたのは、⑧何か買つてもらったことと、どこかに連れていつてもらったことばかりでした。私は、ちよつと違うのではないか、そんなものが本当に幸福なんだろうかと思ひました。そのことを友人に話したところ、友人に「それは訳が悪い」と即座に言われました。彼女は同じ質問を子どもたちにしてみたことがあるというのです。ほうつておけば、そういう答えしか出てこないのは当たり前、と私は彼女に言われました。では、どうしたらいいのか。彼女が教えてくれたことはこうでした。「何かを買つてもらったことと、どこかに連れていつてもらったことを除いて、一番楽しかった思い出は何？」と聞いてみることに。それで昨年からは私も「何かを買つてもらったことと、どこかに連れていつてもらったことを除いて、子ども時代の一番幸せな思い出は何？」と聞くようになりました。すると、出てくること、出てくること。それぞれ一冊の本ができるくらいすてきなものが出てくるんです。

今年、ある学生はこう言いました。幼稚園にいつていた頃、おばあさんが入院していた。そこでおじいさんと、ちよくちよく病院にお見舞いに行った。その時、電車に乗つて行つたそうなんですが、その電車の中でおじいさんが隣に座っている幼い彼女の膝をトントントントン叩き続けてくれた、というんです。

それが彼女にとって子ども時代の一番幸福な思い出だと。なんてすてきなんでしょう。おじいさんにしてみれば、ただ不安だったのかもしれない。もしかしらばおばあさんを近いうちに亡くすかもしれないという不安にさいなまれていたのかもしれない。でも、子どもにとって、電車に乗っている間おじいさんがずつと自分の膝をトントントントン叩き続けてくれたことは至福と言つていいことだったのです。

また、ある学生はこう言っています。まだ靴下を自分で履けないくらい小さかつた頃のこと。母親はいつも靴下を履かせてくれた後に、足をくると撫でてくれたというんです。これは、よくやることもありませんね。彼女は、あの撫でてもらった感触が忘れられないと言っています。それから、こう言つた学生もいます。自分の母親は専業主婦でずっと家にいて、学校から帰ると「おかえり」と迎えてくれたけれど、それが「おかえり」だけじゃなかつたということです。「○○ちゃん、おかえり」と必ず自分の名前を呼んでくれた。そのことが嬉しかったというんです。

そういう、つまり⑨日常にあるそういう幸せをしつかりと受け取る力が子どもにはあるんですね。ちゃんとある。でも、子どもたちの、あるいは学生たちの、一人ひとりにあるにもかかわらず、それを放っておきますと、イベントや買い物物のほうに目が行つてしまふ。そういうものに邪魔されて見えなくなつてしまふんです。そして、(中略)自分たちの日常なんてつまらないものと思ひ込まされていく。語るに値しないものだと思ひ込まされていく。そういう力が今、私たちにいろんな形でのしかかつてきている。それは幼い子どもにとつても同じです。⑩毛穴から空気が入つてくるように、そういう意識を持たされていく。自分たちの日常なんて話すに値しないことなんだと思ひ込まされていく。でも、そんななかで子どもの文学は、日常の中にある幸福に驚く力を私たちの中に培つてくれるんですね。

ただ問題は、⑪そういう物語を手許に手繰り寄せる力が弱まつていくことです。私は今、それがとても心配です。今は何をかいても、読み書きの力を学校でちゃんとつけてやつてほしい。いつの時代でも、読み書きはちゃんとしてほしい。読む力が衰えてきますと、私たちの先人が残していつてくれたすてきな日常の物語、幸福の物語が、子どもたちに手繰り寄せられないということになります。数々のそういう物語がすぐ傍らで手が伸ばされてくるのを待つているというのに。そうなつていきますと、一人ひとりがただ孤立していきます。バラバラに切り離されていく。私は、solitude(※一人ぼっち、孤独)は人が人として生きていくためには欠かせないものだと思ひますが、isolation(※孤立、分離)つまりバラバラに孤立していく、誰とも関係なく立つている状態は、人間としてあまりに寂しいことだと思ひます。

いまのように、文字を読む力、書く力、さらには他人の話を聴く力が衰えていきますと、一人ひとりがバラバラになつていく危険がある。ここにいらつしやる方はみなさんご経験があると思ひますが、何十年もかけてやつと思ひついたら、そのことはとつくの昔に先人たちがちゃんと書いてくれた。そうか、こういうことは、もうとつくに書かれていたんだな。すごいなあと思ふ。そのとき初めて私たちはその⑫歴史とつながつていきますよね。前に生きた人たちと、時間・空間をこえてつながつていく。そういう形でいろんな人とながつていく。やつぱりそういう中で生きたいと思ふんですね。

そのためにはどうしても、読み書きをしつかり学ぶ。そして、算数あるいは数学も。「勉強はできなくてもいい」という大人がいますけれど、⑬私は勉強はできたほうが絶対いいと思ひています。物理でもなんでもできたほうがいい。それは、人を押しのけるためではありません。他者とつながるためにです。誤解されることを承知言うのですが、いろんなものができたほうが、やつぱりいいのです。楽しめるのです。今は、勉強のしあがるため、とすぐ取られちゃいますけれど、本当はそうではない。できないものは仕方ありませんが。私もできないことばかりです。できることは、ほんとにわずかしかない。でも、できたほうがいいと思ひています。コンピュータの操作もそう。反発しているわけではありません。そうやつて人とつながつて、もつともつと世界を楽しんだり、いろいろなものを見極めたりできたほうがいいと思ふのです。

問一 ―①「うまい言い方」とは、ここではどういう表現のことですか。次から選びなさい。

- ア 普通の人が全く予想もできない表現
イ 人を納得させるようなたくみな表現
ウ 真実と思わせるもつともらしい表現
エ 人の心に強く残る味わいのある表現

問二 ―②「そこなんじゃないか」とありますが、「そこ」の指し示している内容をわかりやすく説明しなさい。

問三 ―③「一手に引き受ける」とありますが、

(1)「一手に」の意味を次から選びなさい。

- ア 一回だけで イ 休みなくひといきに
ウ 同時にそろって エ 自分一人だけで

(2) 次の文には「手」を使った慣用句が含まれています。空欄にあてはまる言葉を書きなさい。

- i () から手が出るほど欲しい。
ii 手 () にかけて育てた子ども。
iii 忙しくて () の手も借りた。

問四 ―④「中心にいる人たち」とは誰のことか、あてはまるものをすべて選びなさい。

- ア 子ども イ 老人 ウ 壮年期の人
エ 親の世代の人 オ 先人たち

問五 ―⑤「ものわかりが悪い」とは、ここではどういうことですか。適切でないものを次から選びなさい。

ア 大人は正しくて、子どもは何も知らないと決めつけ、本気では相手にしていないということ。

イ 子どもが使う言葉を忘れてしまっており、繰り返し説明しないと理解しないということ。

ウ 夢や空想の世界を軽んじて、現実的なことばかりに目を向けているということ。

エ 子どもの気持ちをくみ取ろうとせず、大人の判断でしか物事を捉えようとしないうということ。

問六 ―⑥「しっかりと支えている」とありますが、具体的には何をしていると言えますか。本文から探し、最初と最後の五字を答えなさい。

問七 ―⑦とありますが、筆者の考える「子どもの文学の力」とはどういうものですか。文章全体から探して、最初と最後の五字を答えなさい。

問八 ―⑧「何か買ってもらったことと、どこかに連れていってもらったこと」に置きかえられる語句を、本文から十字以内で抜き出しなさい。

問九 ―⑨「日常にあるそういう幸せ」とはどういう幸せですか。最も適切なものを次から選びなさい。

ア 不安を抱えている時に、自分という個人に向けられた愛情から、他者とのつながりを感じた幸せ。

イ 甘えることを許してくれるという、ある一定の時期にしか得ることのできない、特別な幸せ。

ウ 自分がしてほしいと望んでいたことを、言葉にしないで分かってくちなえてくれたという幸せ。

エ 身近な人との直接の触れあいを通して、自分が受け入れられていることを実感したという幸せ。

オ 自分も大切に思っている相手から、自分だけが大切にされているという安心感を得られた幸せ。

問十 ―⑩とありますが、

(1)「毛穴から空気が入ってくる」とは、どんな様子をたとえていますか。次から選びなさい。

ア 当たり前に習慣として行われている様子。
イ 人間本来の生き方に即している様子。

ウ 知らぬ間に外からの影響を受けている様子。

エ 体全体が敏感にとぎすまされている様子。

(2)「そういう意識」とはどついう意識か、答えなさい。

問十一 ―⑪とありますが、「物語を手許に手繰り寄せる」とはどういうことですか。自分の言葉でわかりやすく説明しなさい。

問十二 ―⑫とありますが、「歴史とつながっていく」とはどういうことですか。最も適切なものを次から選びなさい。

ア 昔の人の感じ方考え方に共感し、その存在を身近に感じられるようになるということ。

イ 自分の生まれる前にあつた出来事が、今の自分を作っていると理解するということ。

ウ それまで知識として知っていた過去に、実感が伴うようになってくるとのこと。

エ 日常の幸福の物語は、先祖から代々受け継がれてきたものだと思つくとのこと。

問十三 ―⑬「私は勉強はできたほうが絶対いいと思っています」とありますが、筆者がそのように考える理由を、二点答えなさい。

三 次のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 水分がジヨウハツした。
- 2 原因をキュウメイする。
- 3 遠足が一日ノびる。
- 4 子犬をアズかる。

